

1. 大会全般

1) 大会概観

FIFA U17 Women's World Cup (以下、U17WWC と略記) は、女子サッカーにおける育成年代初めての世界大会であり、各国が互いの選手育成の取り組みや方向性を理解するうえで重要な大会となっている。第3回となった本大会は、アジアとヨーロッパの間にあるカスピ海に面するアゼルバイジャンで行われた。大会には、各大陸予選を突破した16チームが参加し、2012年9月22日から10月13日までの期間で32試合が行われた。16チームが4グループに分かれ予選リーグを行い、グループの上位2チームが決勝トーナメントに進出した。

2) 大会結果

ベスト4には順にフランス・北朝鮮・ガーナ・ドイツが、ベスト8には日本・ブラジル・カナダ・ナイジェリアが進出した。決勝は、近年世界大会で着実に実績を積み上げるフランスと第1回大会優勝の北朝鮮の対戦となった。決勝は拮抗した試合となったが、フランスがPK戦を制し、すべての年代を通じて初の女子サッカー世界大会優勝を飾った。一方、日本代表は攻撃的サッカーを展開したものの、ガーナに敗れベスト8にとどまった。

また最終日の3位決定戦と決勝には、27,000人を超える観客がスタジアムを埋め、アゼルバイジャンでの女子サッカー普及への取り組みが強く感じられた。



GROUP A

Team	MP	W	D	L	GF	GA	Pts
Nigeria	3	2	1	0	15	1	7
Canada	3	2	1	0	3	1	7
Colombia	3	1	0	2	4	4	3
Azerbaijan	3	0	0	3	0	16	0

GROUP C

Team	MP	W	D	L	GF	GA	Pts
Japan	3	3	0	0	17	0	9
Brazil	3	2	0	1	5	8	6
Mexico	3	1	0	2	1	10	3
New Zealand	3	0	0	3	3	8	0

GROUP B

Team	MP	W	D	L	GF	GA	Pts
Korea DPR	3	1	2	0	13	2	5
France	3	1	2	0	11	3	5
USA	3	1	2	0	7	1	5
Gambia	3	0	0	3	2	27	0

GROUP D

Team	MP	W	D	L	GF	GA	Pts
Germany	3	2	1	0	8	4	7
Ghana	3	2	0	1	8	2	6
China PR	3	1	1	1	5	3	4
Uruguay	3	0	0	3	2	14	0

3) 分析の視点

U17WWCでは、「インディビジュアル（「個」）のベース」、「コレクティブ（グループとして機能する）・フットボールへの取り組み」の両者を分析することで、各国の育成への取り組みがどの方向へ向かっているのかを確認できる場となっている。そこでTSGでは、世界各国の戦いからU17年代の育成の方向性を、また日本の戦いから世界における日本サッカーの現在地、従来の育成強化策を検証した。

さらにTSGでは、急速に変貌しつつある世界の女子サッカーを念頭に、2年後の次回大会を見据えた中で日本選手の「強みと弱み（成果と課題）」を分析し、今後の選手育成について検討した。

2. 大会のトレンド

1) 個のテクニックのベースアップ

前回大会のTSGでは、「インディビジュアル（個）」のレベルが向上し、「グループで展開する大人のサッカー」に近づいていると分析した。本大会でも、インディビジュアルのベースすなわち個のテクニックはさらに向上し、プレッシャーの少ない状況ではボールを止めて蹴る、運ぶことにストレスを感じさせる選手はほとんど見られなかった。そしてオンザボールのテクニック向上は、オフザボールの関わりを増やし、グループとしてのサポートやアクションの質を意識してプレーすることを可能にしていた。上位進出チームでは、オンザボールのテクニックに加え、オフザボールの関わりが向上し、グループやチームとしてボールと人が動きながらゴールを目指すコレクティブな攻撃が行われていた。

2) コレクティブ・フットボールの広がり

個のテクニック向上に加え、個の戦術理解が高まることで、攻守にわたりグループとして機能する「コレクティブ・フットボール」に取り組むチームが増加した。

攻撃では、GKを含めDFからのビルドアップを志向するチームが増え、守備では、グループやチームがユニットとして協働し、組織的な守備ブロック形成からボールを奪えるチームが大幅に増加した。また、意図的に相手を誘導しボールを奪うプレーが随所にみられ、コレクティブな守備から素早い攻撃を企図しているチームもみられた。

3) フル代表と同様のプレースタイル

本大会では、直前に行われたロンドンオリンピックや一昨年のドイツワールドカップで、各国のフル代表が実践したプレースタイルに取り組むチームが多く存在した。特にベスト8に進出したチームでは、フランス・北朝鮮・ドイツ・ナイジェリア・カナダ・ブラジルの6か国が、フル代表と同様のフォーメーションとプレースタイルに取り組んでいた。このことは、各国が育成年代から自らのプレースタイル構築に一貫して取り組んでいることを示していた。

4) ベスト4進出チームとアメリカ

優勝：フランス

フランスは、フル代表と同じ4-2-3-1システムを採用し、攻守にわたり個の確かなテクニックを活かしたコレクティブなサッカーを披露した。またCBやFWには高いフィジカルアビリティを持つ選手を、中盤には優れたテクニックを持つ選手を配し、フル代表と同じ攻守一体のサッカーを志向していた。しかし決してシステムありきのサッカーではなく、攻守にわたり個のテクニックを活かした中で、グループとして協働するフランスのサッカーは、これからの女子サッカーの一つのモデルとなる質の高いフットボールであった。

準優勝：北朝鮮

北朝鮮は、フル代表と同じ4-4-2システムを採用し、個々の確かなテクニックとU17年代の中では非常に充実したフィジカルアビリティをベースに、攻守にわたりコレクティブなサッカーに取り組んでいた。

3位：ガーナと4位：ドイツ

ガーナは、高いフィジカルアビリティとアフリカ選手特有のしなやかなテクニックを活かし、自陣での強固な守備ブロックから激しい守備でボールを奪い、素早いファストブレイクを強みとしていた。

ドイツの組織的守備は高いレベルにあったが、チームにフィジカルコンディションの整っていない選手が散見された。また、攻撃時にアイデアや創造性を表現できる選手が少なく、セカンドラウンドからは苦戦を強いられていた。

アメリカ

アメリカは、グループステージのフランスおよび北朝鮮に対し、得失点差で及ばず敗退した。しかし、フ

イジカルアビリティと対人能力の高さを活かし、激しい守備からダイナミックかつスピーディーな攻撃を披露し、育成年代でも世界のトップレベルにあることを示した。

5) トップリーダーに続く国々の成長と変化

本大会では、優勝したフランスをはじめ3位ガーナ、カナダ、ブラジルなど、前回大会ではベスト8進出していないチームが大きく躍進した。また前回大会優勝の韓国は、アジア予選で敗退し本大会出場を果たせなかった。

この結果は、女子サッカーにおいても、多くの国が育成年代の選手育成に取り組みによる競技環境の充実、また強豪国といえども大陸予選で容易に勝ち抜けない状況となっていることを示した。

6) 世界の中でのアジア

アジアの国々では、準優勝の北朝鮮、ベスト8の日本に加え、中国がグループリーグでドイツと引き分ける健闘をみせた。アジアの国々における「個のテクニック向上」や「コレクティブなサッカーへの取り組み」は、アジアの育成年代の競技力が世界の強豪国と肩を並べるレベルにまで高まっていることを示した。

3. 技術・戦術的分析

1) コレクティブ・フットボール

今大会では、個のテクニック充足により、攻守にわたる戦術行動が「個人」から「グループやチーム」のレベルに発展していた。チーム間に未だ差はあるものの、コレクティブなプレーを支える「個のプレーの質」は、前回大会からさらに成長していた。

2) コレクティブな守備

チームとしてのコレクティブな守備

多くのチームが、グループとして連携連動した守備に取り組んでいた。特に上位チームでは、確かな個の守備能力をベースに、自陣で組織的な守備ブロックを形成し、チームとして意図的に相手ボールを奪うシーンが随所にみられた。表1に示すように、ベスト8のチームが対戦した決勝トーナメントでは、2008年および2010年のU20WWCに比べ得点が大きく減少した。この結果は、上位チームではコレクティブな守備が急進し、各チームが強固な守備組織を構築したため、容易に得点が奪えなくなったことを反映しているものと考えられる。

またフランスやドイツは、ボール奪取後の攻撃をデザインしたコレクティブな守備に取り組んでおり、個のプレーの強度やスピードではフル代表に劣るものの、U17年代では高いレベルでコレクティブな守備を実現していた。

このように世界のトップレベルでは、U17年代でも、守備に関するプレーの原則に基づいたコレクティブな守備に取り組むことがスタンダードとなっていた。

表1 U17WWCにおけるステージ別得点と割合

	グループステージ	決勝トーナメント	合計
ニュージーランド大会 2008	83 (73.5%)	30 (26.5%)	113 (100%)
トリニダード・トバゴ大会 2010	94 (75.2%)	31 (24.8%)	125 (100%)
アゼルバイジャン大会 2012	104 (87.4%)	15 (12.6%)	119 (100%)

(データはFIFA Technical report and statistics, 2008, 2010, 2012より引用)

表2 U17WWCにおけるオープンプレーとセットプレーの得点と割合

	オープンプレー	セットプレー	合計
ニュージーランド大会 2008	92 (81.4%)	21 (18.6%)	113 (100%)
トリニダード・トバゴ大会 2010	99 (79.2%)	26 (20.8%)	125 (100%)
アゼルバイジャン大会 2012	95 (79.8%)	24 (20.2%)	119 (100%)

(データはFIFA Technical report and statistics, 2008, 2010, 2012より引用)

個人でボールを奪いきる、グループとしてボールを奪う

本大会では、守備の原則を理解し、フェアで激しいチャージにより、「個でボールを奪いきる能力」を持つ選手が多くみられた。特にベスト4に進出したチームの選手は、高いフィジカルアビリティを併せ持ち、相手の状況に合わせた守備の判断、すなわち「積極的に奪いに行くのか、遅らせて奪うチャンスを作り出すのか」を適切に判断できる選手が多かった。

全体としては、個の守備能力をベースに、グループとしてコレクティブにボールを奪う能力が向上した。しかし、チームの中で適切にプレーできない選手が散見されるチームも多く、チーム全体でのグループ戦術の理解とプレー実践がこの年代の課題となっていた。

3) コレクティブな攻撃

ビルドアップからの攻撃

本大会では、多くのチームがビルドアップをベースにした攻撃を志向していた。U17年代でも、DFからボールを丁寧に動かしながら攻撃をビルドアップすることが主流となっていることが確認された。

個のテクニック向上は、オフザボールでのアクションの選択肢を増やし、コレクティブな攻撃への取り組みを可能としていた。その中でも、フランス・北朝鮮・日本は、確かなテクニックをベースに、攻撃時には複数の選手が関わりながら、ボールをテンポよく動かしゴールへ向かう攻撃を志向していた。それ以外のチームでは、全体のテクニックが向上し確かなテクニックを持つ選手が複数いるものの、未だ動きながらのテクニックが不足している選手が存在し、上位チームとの対戦ではコレクティブな攻撃を実現するには至っていなかった。

プレッシャーの中でのテクニックと状況に応じた判断

コレクティブな守備が整備される中、ボールホルダーへのプレッシャーが強まり、攻撃におけるテクニックの重要性が高まっていた。厳しいプレッシャーのかかる局面では、上位チームの選手でもミスからボールを失うプレーが多くみられた。また相手の状況により、攻撃のテンポや攻撃の方向性を変えられるチームはほとんどみられなかった。

厳しいプレッシャーを受ける中での確かなテクニックの向上、状況に合わせた攻撃方法の判断とその判断を実現する多様なテクニック習得がこの年代の課題となっていた。

4) “傑出した個”の埋没

各年代の世界大会と同様、多くのチームが攻守にわたりコレクティブなフットボールを志向する中、傑出した個の能力で局面を打開するプレーは大きく減少した。その意味では、傑出した個の能力を持つ選手の成長が、コレクティブなサッカーの中で埋没しているように感じられた。

チームとしてコレクティブなサッカーが主流となる中、U20やフル代表ではチームとして機能しながら要所では瞬間的に個の能力で局面を打開できる選手が必要不可欠となっている。U17年代でも、コレクティブなサッカーを進める中で、そのような傑出した個を積極的に育成することが今後の課題となるかもしれない。

4. 日本の現在地

前回大会準優勝の日本は、今大会での優勝を目標とし大会に臨んだ。グループリーグでは、ニュージーランド、ブラジル、メキシコに対し、常に試合の主導権を握り、積極的な攻撃サッカーでグループ1位となり準々決勝へ進出した。しかし、準々決勝のガーナ戦では、ボールを保持し中盤まではビルドアップできても、相手守備ブロックの内側へ効果的に侵入することができず、決定な場面を作れずに敗戦した。

今回の日本は、FIFA関係者からも高い評価を受けたテクニカルな積極的攻撃で、ゲームの主導権を握れることが多かった。しかし、セカンドラウンド初戦のガーナ戦では、先制点を許すとその後は身体能力を活かした厳しい守備のガーナに対して、相手守備ブロックの外側では効果的なビルドアップが行えたものの、バイタルエリアからゴール前に容易に侵入ができなかった。ガーナとの戦いでは、世界のトップレベルと戦う中で日本選手の改善すべき課題が改めて顕在化した。

ここからは、本大会でみられた「日本の強みと弱み（成果と課題）」、加えて「強みの強化と弱み改善の方向性」について考えたい。

1) 攻撃の成果

ビルドアップでのテクニックの向上

グループリーグでは、DF 選手からのボールの持ち出し、中盤でのターン、アタッキングサードでの個の仕掛けに成果がみられた。相手選手を観ながら、チャンスがあればDF 選手であっても、より効果的なエリアにボールを運び、数的有利な状況を創り出すテクニックは大きく向上した。また前を向いた状況では、相手の密集する狭いエリアでも細かなステップやテクニックで果敢に仕掛けていくプレーも随所にみられた。

オフザボールの動き

ビルドアップの中で、選手はDF 背後へタイミングよくアクションを起こしていた。またボールを受ける前に予備動作を入れ相手を意図的に動かす、あるいはぎりぎりまで相手を観ることで、優位な状況を作り出す「駆け引き」のあるプレーが成果としてみられた。

広がりのあるビルドアップ

日本は、DF からボールを動かし相手がボールサイドに集中すると、逆サイドへボールを展開し、広がりのあるビルドアップから突破のチャンスをうかがうことができていた。

2) 守備の成果

多様に対応できるポジショニング

選手は、相手がボールを動かす間に、スペースと相手の両方、あるいは複数の相手選手に対応できるポジショニングを意識し、実践できる場面がみられた。多様に対応可能なポジショニングには、ボールの移動中に後方を含め周囲を観察することが必要不可欠となる。守備時にも周りを観ることの重要性を理解し実践できる選手が増えていた。

連続したアプローチで奪う

ファーストDF が相手のプレーを制限できた局面では、複数の選手が連続してアプローチを行うことで、ボールを奪う場面がみられた。コンパクトフィールドが形成できた状況では、日本選手の俊敏性と連続的動きを活かした守備ができていた。

状況に合わせた守備

守備においては、相手のボール状況に合わせ、「ゴールを守るのか、それともボールを奪うのか」という判断が重要となる。相手状況の悪い場合には、自分のマークを捨て積極的にボールを奪いに行くプレーがみられた。一方、相手状況の良い場合には、相手のスピードを吸収しながら味方選手の帰陣を待ちボールを奪うチャンスをうかがう、あるいは後方のスペースをコントロールしながら相手の攻撃を遅らせるなど、適切な判断に基づいた守備ができる場面がみられた。

3) 攻撃の課題

状況に応じた仕掛け

日本には、相手のカバーや守備ブロックの整っている状況でも、スピードアップして個で仕掛けていく、あるいはサポートのない選手にパスを送りボールを奪われるなど、状況に応じて判断できないためにボールを失う場面が多くみられた。対峙する相手だけでなく、カバーの選手や相手の守備ブロックの状況を観ることで、効果的な攻撃を選択すること、またボールホルダーの選択肢を増やす効果的な関わりが今後の大きな課題となろう。

ボール際のフィジカルコンタクト

プレー判断の遅れからボールを持ち過ぎる、あるいはルーズボールなど相手のコンタクトを受ける場面でも競り負ける選手が多くみられた。相手のコンタクトを受けても、相手をブロックしボールを保持できるフィジカルコンタクトの能力を高めることが今後の大きな課題である。またボールに早く寄る、相手を観ながらボールを受ける角度を変えるなど、オフザボールの駆け引きにより、有意な状況を作り出すことにも取り組む必要がある。

強固な個や守備ブロックへの仕掛け

強靭な身体能力を活かして強固な守備ブロックを構築するガーナとの対戦では、個の仕掛けによる突破が封じられ、ボールを失ってしまう場面が多くみられた。

まずは、引き続き「個」での仕掛けの能力を高めることが重要である。併せて、ゴールへ向かうプレーの選択肢を「グループ」として増やすこと、例えば複数の選手がゴールへ迫るアクションを起こすことで多様な選択肢を作り、その中で個の仕掛けを効果的に発揮することが今後の大きな課題となろう。

サイドアタックの質

コレクティブな守備を取り入れるチームが増え、中央に強固な守備ブロックを構築するチームが増えた。そのため、日本はサイドアタックからゴールチャンスをうかがうプレーが多くなった。しかし、キックの飛距離とクロス精度がともに低く、味方選手に合わせるができなかった。またゴール前に飛び込む選手が少なく、相手守備の予測を容易にしまい、効果的に守られる場面も多くみられた。

キックの飛距離と正確性を向上させるとともに、ゴール前に飛び込むアクションの質の向上や、リスクを負い複数の選手がゴール前に飛び込んでいくプレーも今後の課題となろう。

ゴール前のプレーの質

ガーナ戦では、バイタルエリアやゴール前で相手のプレッシャーを受ける場面で、ボールを受ける前に観ることができなくなり、コントロールでボールを失う、あるいはシュートミスをしてしまう場面が散見された。

相手守備を崩し切ることのできない場面では、ゴール前の「限られたスペースと時間」でのゴールを奪うプレーが必要とされる。相手の厳しい守備を受けながらも、しっかりと観て適切に判断することで、効果的なコントロールやシュートを可能にすることが今後の課題となろう。

また1人の選手だけでなく、複数の選手が有効な駆け引きの中で同時にアクションを起こすことで、相手DFに的を絞らせないことも今後の課題となろう。

チャンスを感じる力

守備から攻撃のトランジション局面、素早いサイドチェンジや相手のミスなどで相手の守備が整っていない状況では、積極的な攻め上がりでゴールチャンスを作り出すことができる。日本選手は、上記のチャンスを感じ、勇気を持ち一気呵成に複数の選手がゴールを目指しアクションを起こす意識が不足していた。

4) 守備の課題

強くボールを奪いきる：球際のフィジカルコンタクト

適切な対応で相手のプレーコースに身体を入れられる状況でも、再び相手のコンタクトプレーで身体のをぶらされてしまい、身体を入れ替えられボールを奪い返される場面が多くみられた。

動きながらも体軸をしっかり保持し、相手とのコンタクトに競り勝てるフィジカルコンタクトの能力向上が、日本選手の大きな課題となっていた。

スピードに乗った相手への対応

スペースを与え相手にスピードに乗られた状況では、2,3人の選手が一人の相手選手にドリブル突破を許してしまう場面が散見された。まず相手をスピードに乗らせないよう、攻撃から守備のトランジション局面で素早く相手の攻撃を遅らせ、スペースを制限しコンパクトな守備ができるようにすることが重要となる。

しかし、スピードに乗られた相手に対しては、適切な間合いで相手のスピードを吸収しながら、ボールを奪うチャンスを作り出す対応は、日本選手の身に付けるべき課題となった。

ゴール前の守備

日本選手には、相手のクロスに対しゴール前でマークする選手に背後をとられてしまう場面が多くみられた。クロス精度向上が顕著なU20やフル代表の世界大会を考えると、U17年代も今後ますますクロスに対する守備対応の重要性が増すと考えられる。相手とボールが同一視でき、先にボールに触れられるポジションを原則としながら、相手とボール状況に合わせて適切に対応する能力を向上させることが今後の課題である。

ピンチを感じる力

相手攻撃のスピードアップに対して、一瞬相手よりも帰陣が遅れて先手を取られ、ゴール前に脅威となるアクションを起こされてしまう場面が多くみられた。攻守の切り替え局面や相手の攻撃スピードが急激に変化する場面では、ピンチを感じ相手よりも素早く動き出せる、すなわちピンチを感じ迅速に対応できる能力を身に付けることが、日本の大きな課題となっている。

GKとDFの連携

本大会のガーナ戦では、GKとDFの連携が取れず、思わぬピンチを招いてしまう場面が散見された。自分の意思を伝えきる声やアクションを徹底し、責任をあいまいにせず互いに連携して守備をすることが、日本の大きな課題である。

5. 日本の「強み」を「武器」に

今回の U17WWC では、各国選手の個のテクニック向上により、前回大会よりさらにコレクティブなサッカーが大きく進んだ。そのなかで、日本選手たちは、細やかな個のテクニックを活かし、積極的攻撃サッカーを展開した。しかし、ガーナ戦では、個のテクニックで作りに出した数的優位な状況を、オンザボールの選手の判断ミス、オフザボールの選手の関わりの意識の低さから活かせず、ボールを支配しながら決定的なチャンスを作り出すことができなかった。

他の世界大会の分析から、コレクティブなサッカーは、今後さらに進むものと考えられる。そのため、攻守分業をベースに、個の力で得点を奪う戦略では、もはや大会を勝ち抜けなくなっている。このことを考え合わせると、急速に成長する世界の女子サッカーの中で戦うためには、日本は自らの強みを確立し、さらに磨いていくことが必要不可欠となる。今大会の TSG としては、日本の強みとすべく取り組みたい課題を下記のように分析した。

(1) 個のテクニック

日本選手特有の細やかなテクニックは、この大会でも十分に通用していた。引き続き、細やかなテクニックの質をさらに確かなものに向上させることが望まれる。具体的には、「状況を観ながら、動きながらプレーする」ことに必要なテクニック、またゴール前の攻防に代表される「時間とスペース」が非常に制限された状況での確かなテクニックをさらに磨いていくことが非常に重要である。

(2) 賢い駆け引き

勤勉にハードワークすることに加え、今後は相手やゲームの状況を観ながら、意図的に相手を動かし、さらに優位な状況を創り出すことを求めていきたい。賢く駆け引きするためには、確かなテクニックに加え、プレーの原則を理解したうえで、あえて原則を外して相手を誘い出すようなアイデアも必要となる。プレーの原則やサッカーというゲームの理解を高め、賢い駆け引きを強みとしていきたい。

(3) コレクティブな関わり

「察する」ことは、日本が世界に誇れるメンタリティーの 1 つである。この特質をサッカーのプレーに積極的に活用したい。つまり、あらかじめオーガナイズされた関わりでなく、ボールや相手、味方の状況を観ながら、攻守にわたり 3 つ、4 つ、5 つ先の状況を察し、複数の選手が効果的に関わってプレーできるようにしたい。

しかし、コレクティブな関わりですべてを解決できるわけではない。個のテクニックをさらに高め、シンプルに相手を突破できる能力を獲得してはじめて、賢い駆け引きや察するプレーが最大限に活かされるのである。

(4) 連続した俊敏な動き・運動量

体格やパワーに劣る日本選手のフィジカルアビリティは、世界で戦う上での弱みと捉えられてきた。しかし、切り返しを伴う連続した俊敏な動きや運動量は、日本選手の強みとなっている。この日本選手のフィジカルアビリティをプレーに最大限に活かすことに取り組んでいきたい。

そのためには、育成年代から「意のままに全身を操れる」よう、様々なコーディネーショントレーニングを積極的に取り入れていくことが重要となる。また、臆することなく身体をぶつけてプレーする中で、「正しく、強いフィジカルコンタクト」を伴うプレーを獲得できるプレー環境、すなわち「甘えの許されないプレー環境」を指導者が作り上げていくことが必要不可欠となる。

6. おわりに

日本の女子サッカーは、確実に成長しており、世界大会での実績がそれを裏付けている。しかし、世界の国々も、育成システムを整備し、進歩を続けている。その中で我々日本がどのようなサッカーを目指して戦うことが必要とされるのか、またそのためには育成年代から何を獲得していくことが求められるのか、選手と指導者が互いに共有した中でトレーニングを積み重ねていくことが重要である。

前回大会のTSGでは、「個」のテクニックを前提とした「集団」フットボールへの道をつくり上げることを日本の課題とした。具体的には、「状況を観ながら、動きながらプレーする」、「守備の基本」、「ゴール前の攻防」、「コミュニケーション」の課題を育成への提言として挙げた。

本大会では、U17年代の日本選手のテクニックの質は確実に向上していた。しかし、前回大会と同様の課題が本大会でも分析された。このことは、日本と同様、世界各国における女子サッカーの急速な成長を示している。このような現状の中、日本が世界のトップレベルで戦い続けるためには、上記に挙げた4つの課題について、育成年代から継続的に取り組んでいくことが必要不可欠である。加えて、「察するプレー」、「プレーの原則を理解したうえで、賢く駆け引きすること」に、今後は積極的に取り組んでいくことが求められるであろう。